本との出会いを楽しむ

第 30 回
図書館長の本棚
「想像力と社会学」

羽渕　一代

弘前大学附属図書館長・人文社会科学部教授。文化社会学を専門としており、主としてメディア文化と若者の親密性の研究をおこなっている。近編著として『現代若者の幸福―不安感社会を生きる』などがある。

『指輪物語』は J.R.R.トールキンのファンタジー小説である。P.ジャクソン監督による映画『ロード・オブ・ザ・リング』でこの作品を知った人も多いだろう。最近では Amazon がドラマ化しており、約 100 年をかけてマルチメディア化されるほどの重要な作品であり、世界最高水準のポピュラリティを獲得した説得性の高い物語である。

社会学は現代の人間関係を対象とする科学であるため『指輪物語』を本コーナーで取り上げるのはいささか不自然かもしれない。しかしわたしは人間にとって想像力ほど重要な能力はないと考えている。また学術の世界に限っても同様のことがいえると思っている。人文科学においてのみならず、社会科学や自然科学においても同様であり、科学者においてもっとも重要な能力は想像力である。

想像力を使って生産されるアートの一つが物語である。そしてファンタジーはその中でももっとも想像力を必要としている。著者のトールキンは作家であるが、古代・中世英語、英文学の学者でもあった。研究した伝承文学や神話から着想を得ているといわれており、研究と創作のあいだをいったりきたりしながら壮大な物語を紡いだのだろうと推測できる。そしてこの物語によって現実社会の言葉も創造されたり、変化させられたりしている。

この物語は、概ね、長い長い旅のエピソードを集めたものである。エピソードには軽重あり、またそれらは人生のレトリックとして読むことができる。つまり細かく些細なエピソードに美的価値が感じられるのである。それらが集積し、人生の美的価値となる。

このような手法は社会学の方法論的エッセンスと通じるものがある。社会学者は様々な社会現象をデータとして収集し、分析をおこない、社会を記述し説明する。その際にデータとして扱われるエピソードや統計データの集積により大きな物語が構築される。

誰でも知っているような凡庸なエピソードや、心躍るような意外なエピソードなど、さまざまな物語があるが、どれも社会を説明するためのピースとなる。また物語ることのできない余白も重要な要素となっている。

研究領域の異なる研究者らから「社会学は何を目指す科学なのか」と問われることが稀にあるが、わたしはいつも字義どおり「社会の成立を明らかにする科学です」と答えている。それではどうしたら社会の成立を示したことになるのか、どのように検証可能なのか、というとそれは自然科学とはまったく異なっており、むしろ優れた文学作品のありようと似ていると思う。なぜなら多くの人々が納得できる社会学的説明力の高い社会理論を示したときにそれは検証されたといえるからである。

（はぶち　いちよ）

「指輪物語．新版」
J.R.R.トールキン著
瀬田貞二，田中明子訳

開架図書（本館 2F）　933 To47